

須田平野古墳 2025 年度発掘調査の成果

京丹後市教育委員会文化財保存活用課
京都府立大学文学部考古学研究室

1. はじめに

須田平野古墳は京丹後市久美浜町須田区に所在する古墳です。川上谷川に注ぐ伯耆谷川右岸の徳良山からのびる尾根の先端に位置しています。その石室形態などから、6 世紀後半に築造された湯舟坂 2 号墳に先行する首長墓と考えられてきましたが、これまでに発掘調査がおこなわれたことはなく、その評価は定まっていませんでした。

京丹後市教育委員会と京都府立大学文学部考古学研究室では、2020 年度から湯舟坂 2 号墳およびその周辺に分布する古墳の学術的価値を再評価し、地域資源として活用するための取り組み（湯舟坂プロジェクト）をおこなっています。この一環で、2022 年度には須田平野古墳の墳丘測量と横穴式石室の実測を、2023・2024 年度には墳丘や横穴式石室の発掘調査を実施しました。今年度は、墳丘南東方の須恵器散布地の範囲や性格を確認するとともに、横穴式石室の構造や当時の埋葬状況を明らかにすることを主な目的として発掘調査をおこないました。また、京都府立丹後緑風高校久美浜学舎 2 年生を対象に発掘調査体験などの連携授業を実施しました。

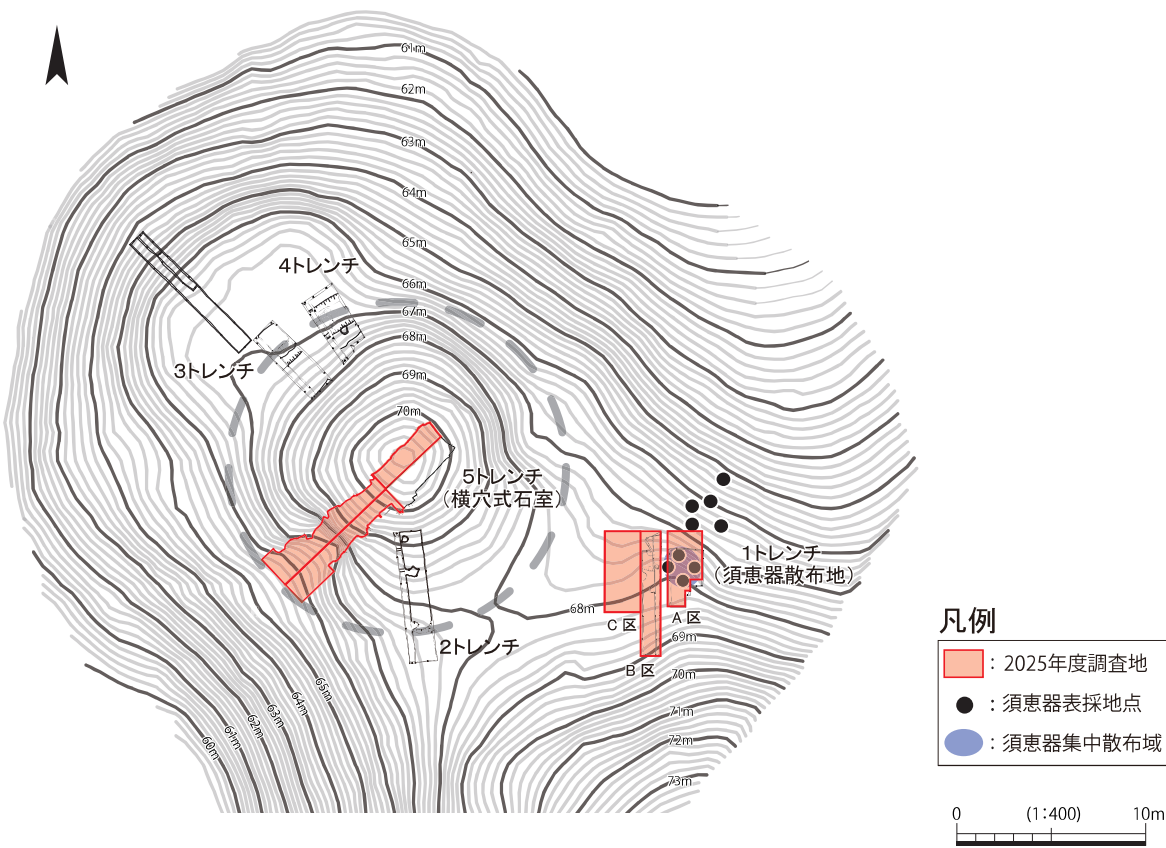


図 1 須田平野古墳の墳丘と今回の調査区

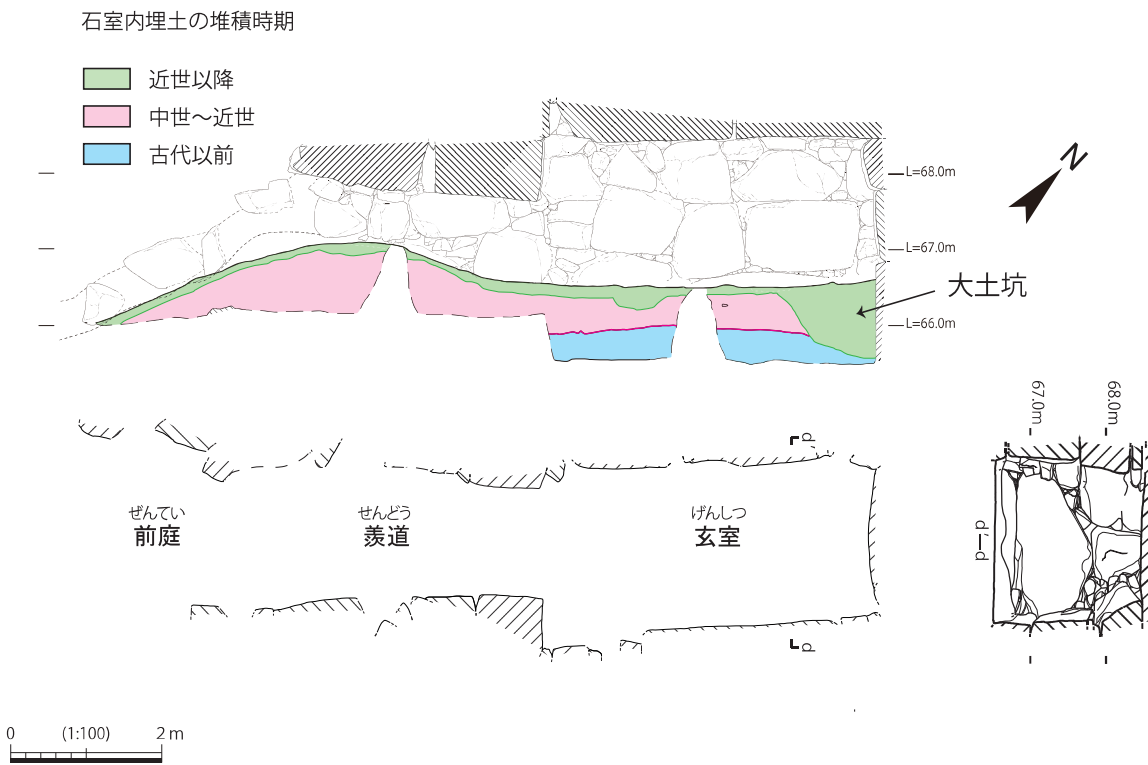


図 2 須田平野古墳の横穴式石室（模式図）

これまでの調査でわかったこと

これまでの調査を通じて、墳丘の形態・規模や横穴式石室の規模・構造などが明らかになりました。まず墳丘の形態・規模については、墳丘南の 2 トレンチで墳丘の裾を、墳丘北西の 3・4 トレンチで周溝を確認したことで、直径約 16.5m、高さ 3.5～4.0m の円墳であったことがわかりました。墳丘は背後の丘陵をほぼ水平に削り出して基盤面とし、墳丘裾部から質の異なる土を交互に積み上げて入念に築造していました。

次に横穴式石室（5 トレンチ）は、玄室長 4.4 m、羨道長 3.5 m、前庭長 1.6 m 以上、全長 9.5 m 以上の規模をもち、前庭が外側に向かってハの字状に開く構造になっています。これは川上谷川流域では湯舟坂 2 号墳に次ぐ大きさです。また前庭から寛永通宝のさし銭が見つかるなど、石室内は古くから開口しており、後世に大きくかく乱を受けていることがわかりました。

墳丘南東方の須恵器散布地（1 トレンチ）からは大甕片や高杯片が出土しました。これらの須恵器片の多くは元の位置から大きく動いておらず、古墳とほぼ同時期に、古墳からは少し離れた位置で、須恵器を用いた何らかの祭祀がおこなわれていたと考えられます。



写真 1 今年度の調査の様子

2. 今回の調査成果

1 トレンチ（須恵器散布地）

須田平野古墳の墳丘南東方に広がっていた須恵器散布地の性格を明らかにすることを目的として、一昨年度、昨年度の調査区と重なる形で、約 18 m²の調査区を設定しました。3 度に及ぶ調査の結果、自然地形を削り出して成形した約 3 m 四方の方形台状遺構を確認するとともに、須恵器片の多くがその上面から出土し、元の位置をほぼ留めていることがわかりました。また方形台状遺構の北側斜面では長辺約 0.8m、短辺約 0.4m、深さ約 0.4mの楕円形土坑を検出しました。土坑の底面には須恵器甕片を敷き、埋土には炭と焼土が含まれていました。



写真 2 須恵器片検出状況（北から）



写真 3 土坑検出状況（東から）



写真 4 方形台状遺構検出状況（北から）

5 トレンチ（横穴式石室）

昨年度に引き続き横穴式石室の規模・構造、築造時期などを確認するため、石室内部から前庭部にかけて約 18 m²のトレンチを設定しました。調査の結果、石室内に最大 1 m 近く埋土が堆積しており、古代から近代にかけて石室内がくりかえし利用されていたことがわかりました。奥壁付近に近世に掘りこまれた大土坑がみつかったほか、石室内から中近世の炉跡が複数検出されました。また、大土坑からは副葬品とみられる鉄製品片や、古代末～中世の土師器や黒色土器、近世の青磁片が出土しており、その底面が石室床面付近にまで及んでいたため、奥壁一段目の石材が幅約 2.0m、高さ約 1.4mの巨石であることもわかりました。これは湯舟坂 2 号墳の奥壁一段目と比べても遜色ない大きさです。また発掘前の石室内の高さは 1.8mでしたが、盗掘坑の底からの高さは約 3 m もありました。



写真 5 大土坑と奥壁一段目の石材

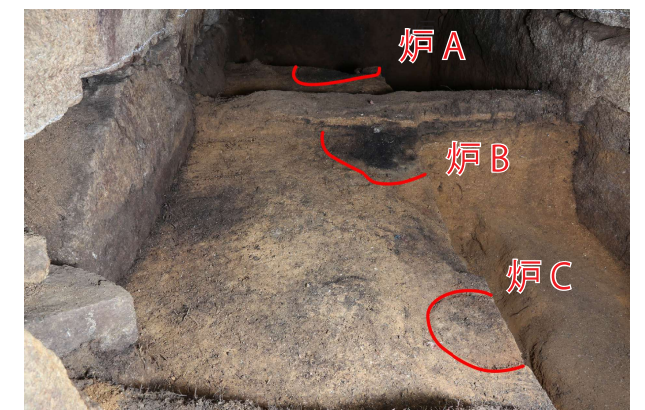


写真 6 炉跡の検出状況

3. 調査成果のまとめ

【1 トレンチ】

・須恵器散布地が約 3 m 四方の方形台状遺構であることを確認し、その斜面で確認された土坑も合わせて、須田平野古墳とほぼ同時期に墳丘南東方で須恵器を用いた何らかの祭祀がおこなわれていたことがわかりました。

【5 トレンチ】

・石室内には埋土が厚く堆積しており、石室が古代以降、近代に至るまでくりかえし利用されていたことが明らかとなりました。

・須田平野古墳の石室が湯舟坂 2 号墳と同規模の巨大な石材を利用して築造されており、本来の石室高は 3 m 近くあったことがわかりました。



調査機関：京丹後市教育委員会・京都府立大学文学部考古学研究室

調査協力：京丹後市久美浜町須田区

調査参加者：京丹後市教育委員会文化財保存活用課・菱田哲郎・諫早直人（教員）・西島翼・山内愛弓・横白彩江（博士前期課程 2 年）・石川達葵・岡崎壮太・渡部凌空（博士前期課程 1 年）・小嶋健斗（大阪公立大博士前期課程 1 年）・栗田晋吾・鮫島聖斗・多田一郎・和田佳織（学部 4 年）・角南博紀・目黒力輝（学部 3 年）・河野舞心・古川花帆（学部 2 年）・小松海斗（学部 1 年）